

世界を揺るがす男

ヤハハ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ワンピースの世界に転生して、自由にやっつく作品です。オリ主、最強になる予定。また、オリジナルの悪魔の実を出します。作者は文章力がないので、温かい目で見守ってください。

目次

神様登場（笑）	1
生まれてきてくれて、ありがとう！	
6	
俺の夢	18
神様再登場（笑）	28
修行の始まり	37
初陣	49
始まりと終わり	68
インペルダウンでの出会い	84
再集結	95

神様登場（笑）

ワンピース世界を揺るがす男

俺は日本に住んでいる大学生だ。

最近は新しい趣味ができた。

それは漫画を読むこと。

ONE PIECE という海賊について描かれた漫画だ。おれはその中でもクロコダイルとエネルが好きだ。

そういう意味ではなくて、単純にかっこいいと思うところがあるんだ。クロコダイルもエネルも自分の信念を曲げずに闘っているところが。

まあ、俺の趣味の話は置いておいて、ただ今俺は病院の屋上から絶賛落下中なのだ。

なぜなら俺は地域のサッカークラブに入っていて、試合中に相手の当たりが強すぎて転んだ時に骨折して、少しの間、入院になっちゃったんだよ。

それで外の空気を吸いたいな、と思ったら、今にも自殺しような子どもがいたから俺が止めに入ろうとしたら、転んじやって……笑。

っていや、笑えねーよ。

こんな死に方い~~~~~~~~や~~~~~~~~だ~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~
！

地面に体がぶつかって、体が軋む。

痛いつてレベルじゃないぞ〜！と自殺レポをしようと思ったら、そこで意識がブラッ
クアウトした。

「ん……ここは？」

「気がついたかの。」

「!!あんたは誰だ!?!」

「ワシはこの世界を担当している、神なり!」

「いや、わざとエネルギーっぽく言わなくていいから。で、ここはどこ?」

「ここは生と死の境地じゃ。」

「つまり、おれは死んだのか?」

「ああ。そうだ。」

内心ガツカリしながら話を続ける。

「おれはいまからあの世へ行くのか?」

「いや、今回は本当にラッキーなことにお主に転生の権利を与えようと思うての。1万年に一回くらいしか転生の権利はでないのじゃ。じゃからわざわざワシがこんな所に来ておるんじゃ。まあ、最終的に決めるのはお主じゃが、どうする?。」

「一ついいか?」

「ん?」

「転生先はどこだ?」

「おお。そうじゃったの。重要な所を忘れておったわ。転生先はONE PIECE

じゃ。どうじゃ、興味が出てきたじゃろう？」

まじか、転生先がONE PIECE なら行くしかないじゃねーか！

神もいとこ突いてきやがるな。

「行かせて貰おう。ただし特典もつけてくれ！じゃないと死んでしまう。」

「よし！それでこそ男じゃ。特典なら、そうだな、5つまでなら許可しよう。」

「おお！ありがとう！！あそこは死亡フラグ満載な世界だからな。強くなれるなら、強くならんといけないからな。じゃあ、ビリビリの実。ロギアで電気を使える能力だな。前世で試行錯誤の末にたどり着いた、俺が考えた最強の能力だ。次に刀を一つ、これも俺が考えたんだが、最上大業物の雷神剣だ。これは電気を操る能力者が持つと数段強くなり、破壊力を増す。3つめは覇気の完備だ。覇王色、武装色、見聞色を使えるようになっていること。覇気の強さについてはまだ未熟の設定で構わない。でないと転生してから海に出るまでやるのがなくなってしまうし、自分で鍛えた方が達成感があるからな。4つめは六式の完備。これも未熟で構わない。理由は覇気と同じだ。最後に容姿についてだが、そこそこのやつにしておいてくれ。流石に前世の様な顔でいったらアウトになるだろうからな。以上で頼む。」

「むう。久しぶりにこんなに強いのを転生させるのう。まあ良い、神にできないことはない。あ、お主はモンキー・D・ドラゴンの息子でルフィの兄という設定にしておくか

らの。最初から破天荒な人生が始まるからの、覚悟しとけよ。」

え、革命家・ドラゴンの息子かよ~~~~!!?

それは色々楽しんでみな部分が盛りだくさんですね、はい。

「わ、分かった。じゃあ、転生させてくれるか?」

「承知した。それでは転生の儀式を始める!」

そう言つて神は変な歌?みたいなのを歌い始めた。

すると俺のいる床にマークが浮かび上がってきた。

そして、目の前が真っ暗になった。

生まれてきてくれて、ありがとう!

真つ暗から目を覚ました、と思つたら、俺は女の人を見上げていた。

この人が母さんなんだな、と本能的に分かる。

流石に赤ん坊で喋るのはまずいので、オギャーオギャーと泣いてみた。

すると女の人は温かい笑顔を俺に向けてくれた。

「リファア。貴方はモンキー・D・リファアよ。生まれてきてくれてありがとう。」

おれの名前はリファアっていうのか! かつこいい名前だな。

その後、4年くらい経つたら、母さんはどこかに行つてしまった。

代わりに酒場の店主が世話をしてくれることになった。

そう皆さんお馴染みのマキノである。

まだ、俺は4歳だが、1人で山に行き、野性動物達と闘つたり、六式の修行や覇気の修行をしていた。

もちろんビリビリの実の修行もしている。

最近新しく生命帰還というCP9が使っていた技を使えるようになり、少しだけ髪

を動かしたり、軽い出血を止めたりと便利な技に成長してきた。
このまま行けば相当な技になるな。

2 years later

俺が6歳の時にフーシヤ村にルファイが来たという噂が耳に入った。

ルファイの年齢は2歳らしいので俺とは4歳差ということになる。

とりあえず、酒場に行ったそうだから、おれも行くかな。

マキノの酒場に行くと、まだ小さいルファイとガープがいた。

ちなみにまだ俺はガープとは面識がないから、初対面風に言ってみた。

「あの一、あなたはだれですか？」

「儂か？儂は海軍本部中将のガープじゃ！お前は？」

「俺はモンキー・D・リファアード！」

「リファアード?!リファアードじゃと。そうか、お前がリファアードか！儂はお前のじいちゃんじゃ

！」

「じいちゃん?!じいちゃん海軍だったのか!？」

俺はロギアだから、ジジイより覇気が強ければ効かないはずんだけどな。

奴の方が強いという訳か。

「痛ってえー！おれは電気なのになんで痛いんだ？！」

「電気？そうかお前、悪魔の実を食べたのか！悪魔の実を食うた上にフザけた口をたたきおって!!ん？ほれ、着いたぞ。」

話しているうちに、コルボ山の中の山賊の家に来た。

ダダンの家じゃん!!おれ今日からここで過ごすのかよ！

「ダダン！出て来い!!!」

するとドアの方からいかついババアが出てきた。

「ガ・・・ガープさん!!ホントもうボチボチ勘弁しておくれよ!!エースの奴は手に負えないよ。つて、ん?えええ何すか そのガキんちよ!!」

「儂の孫じゃ!」

「もう一人増えるー!!?ガープの・・・あ!ガープさんの孫オオー!!?」

「よし、じゃあ選べお前ら。ブタ箱で一生を終えるかこいつを育てるか目を瞑ってやってるお前らの罪は星の数だ!」

「そりやまー捕まるのもやだけど時々監獄の方がマシじゃないかって程まいつてるのに、それに加えてあんたの孫って……」

大人二人が会話をしていたら、いきなり横からツバが飛んできた。

さすがにツバのスピードじゃ遅いから見聞色でかわす。

「いきなり横からツバとは汚えな。誰だお前!？」

するとガープが

「あいつはエースじや。歳はお前より一つ下。今日からこいつらと一緒に暮らすんじや仲良うせい！」

するとダダンも

「決定ですか!!！」

「……………何じやい」

「!!……………いえ、お預かりします!!！」

そして、ガープが帰っていくと、ダダン達から昼飯だから来いと言われたのでついてくことにした。

中に入ると広間みたいところで飯を食べることになった。

「1日に1回、茶碗一杯の米とコップ一杯の水!これだけは保証してやる。後は自分で調達しな、そして勝手に育ちな!」

米と水くれるって、ありがたいね。

「分かった」

「ん分かったんかい!!」

そして、エースが外に行ったので俺もついていってみた。

原作のルフィ程ではないが、半月の間、嫌がらせをされながらたどり着いた、グレイターミナル。

奥の方にエースとサボっぽいのがいたので行ってみた。

「おい！エース!!お前こんなところにいたのか!」

「とうとうついてきやがったか。人が通れるような道は通ってねえのに。」

「コイツかよ。お前が言っていたリファアアって奴。」

「ああ。おれはリファアアっていうんだ。よろしくな!」

「大体な、なんでそんなに友達になりたいんだよ!おれと。」

「だって他に頼りがいねえ!山賊は嫌いなんだよ!お前らがいないとおれは一人になる。一人になるのは辛い。」

「・・・お前、海賊王って知ってるか?」

「ああ。海賊王ゴール・D・ロジャーだろ。」

「おれは、おれはその海賊王の息子だぞ!生きてはいけない存在だぞ!それでも友達になりたいのか!」

「当たり前だ!!エースの親が誰であろうと、生まれてくる子に罪はねえ!!親は親、子は子

「そうだ。少しお前ら下がってろ。」

2人を後ろの方へ下がらせる。

右腕を前の方にかざし、

「電砲!!」

例えるなら、エネルギーの技のエルツールに似ている。

破壊力はエルツールの比ではないが。

目の前の木々だけでなく、先が見えないくらいに、地面が抉れている道路が出来ている。

それほどに電砲の破壊力は凄まじい。

「す、すげえな。ホントに強いんだな。お前ならジジイくらい倒せるんじゃないのか?」

「いやいや、無茶言わないでよ、エース。あれは化け物でしょ。」

「そうだったな。」

「おい、ジジイって誰だ?」

「んーと、俺のじいちゃんだ。凄く強いぞ!」

「お前より強いって、そりゃ化け物だな。」

「それじゃ、今日は帰るか。行くぞ、リファア!」

「おう!じゃまた明日なサボ!」

「おうー！」

「……お前、打ち解けるの早いな。」

隣でエースが呟く。

いや原作キャラと仲良くなりたいたいか思っていないからな、絶対。そう言つて俺たちは別れて、俺はエースと一緒に帰っている。

「そういや、今日の晩飯まだだな。」

「じゃあ、今日は鹿いくか。」

「いいねー、鹿肉うまいよなあ。お、ちようどあそこに！」

「それじゃ、行くぞー！」

そして、鹿を無事に狩りダダンの家に到着。

「このリファアー！どこ行つてたんだよ！お前は雑用を……」

「ほら、鹿肉だ！とつとと焼けよ。」

数十分後、ただ鹿の肉を焼いただけの晩飯が出てきた。なぜかこの世界では、この料理美味しいんだよな。

と思つていたら、肉の争奪戦が始まった。

肉がみるみる内に消えていく。

仕方ない、最近覚えた、技を披露するか。

「サンダールーム!!」

ローの room みたいなのをつくる。

広間くらいの大きさに調節する。

サンダールームの中では電気が駆け巡っていて、身動きがとれないのだ。

いわゆる、感電というやつだ。

もちろん死なないくらいにしてるよ。

死なせることもできるけどね。

サンダールームの中では俺は瞬間移動ができる。

つまり光の黄猿より早く動ける。

これでゆっくり食べられるぞ。

「くっ、くそっ!体が動かない。おい、リファー何しやがる!」

「だいじょーぶだって、俺は肉そんなに食べないから!」

「そんなこといって、それ10個目じゃねーか!」

「あれー?けど、ふー、さすがにもう食えないな。解除!もう動いていいよー。」

そしてすぐまた争奪戦が始まった。

おれは食いまくったから寝るとするか。

歯磨きを終えて、子供の部屋（使われていない物置部屋）に行き布団をひいてたら、

エースが来た。

「もう食い終わったのか？」

「ああ。うまかった。」

「やっぱ鹿肉最高だよな！」

「・・・なありフアー」

「ん？なんだ？」

「ありがとうな。」

「なんだ？急に？」

「あんなこと言われたの始めてだからよ。嬉しかったんだ。始めて俺は生きてていいんだって思えて。」

「この世に生まれてきたんだ。生きちゃ駄目なんてことはあるわけないだろ。」

「うん。」

「そろそろ寝るか。おやすみ。」

「おやすみー。」

そして1週間後には俺達3人の悪名がグレイターミナルはもちろん、中心街の方にも届いていた。

悪ガキ3人組として。

とくにも中でもリファーには近づくな、会ったら逃げろ、という噂が。

俺の夢

5年後

もうそろルフィが来る頃だな。

エース達にも一応話しておいたがエースは多分無理だな。

原作通りになるはずだ。

「痛てえー！おれゴムなのに何で痛てえんだ？」

「お前を生ぬるいフーシャ村に置いたのは間違えじゃった…ん？おおりファアか！久

しぶりだな！元気にしておったか！」

「ああ。元気だったよ。その子がルフィでしょ？」

「ああ。そうじゃ。ほれルフィ、あいつがお前の兄じゃぞ。」

「おれルフィっていうんだ。よろしくな！」

「ああ。よろしく、ルフィ。ほら、エースも挨拶しろよ！」

「チツツ」

俺が言っておいたんだが、エースはルフィにツバをかけた。

なにそれ、ツバかけるのがお前風の挨拶なの?!

「おいおい、エース。」

「行くぞリファー、晩飯の調達だ。」

「ほーい。」

「おい！俺も連れていってくれよ！」

「駄目だ！まだお前には早すぎる！ポロ小屋でおとなしく待つてろ!!」

「ポロ小屋って言うなー!!!」

ダダンが怒りました、なんでだろう？

俺たちは森の中に入っていった。

森に入ると、ちょうどいい熊がいた。

「熊か。今日は熊いくか。またやられんじやねーぞ！エース。」

「ふん。修行の成果を見せてやる。」

「サンダーショック！」

熊に感電をさせて、体を動けないようにする。

そして、動けない内にエースがパイプで頭をぶつ叩く。

実際、おれ一人で倒せるが、そしたら修行の意味がなくなるのでそれはやめている。
「おっしー！」

仕留めることができたなら、ハイタッチをするようにしている。

「もうおれ一人で行けるかもな！」

「なーに言ってるんだ。お前なんか、まだコーン位だよ。」

人差し指と親指で米粒くらいの大きさを作る。

「なにー！言ってくるじゃねーか！」

「ははははは!!」

雑談をしながらダダンの家に帰った。

帰ったら、争奪戦の始まりです。

とりあえず、肉を十個つかんで、自分の定位置に戻る。

すると、ルフィが茶碗一杯しか食べてなかったの、肉を5個くらい分けてあげた。

「ありがとう！リファー！お前、いいやつだな！」

「肉を食わないと力でねーからな。しっかり食っとけよ。」

そして、一日後。

「おーい。お前ら！どっか行くのか？俺も連れていってくれよ!!」

「ついてこれたらな！」

「分かった！」

「おい、リフアー。」

「いいじゃねーかよ。俺の实の弟だ。頼むよ。」

「お前がそう言うなら。」

そして、ルファイが山をさ迷いながらおれらについてくること、数ヶ月。

ようやく、グレイターミナルにたどり着いたようだ。

「おーい！リフアー！エース！こんな所にいたのか！」

「チツ、こんなところまで追ってきやがったぞ、リフアー！」

「さすが俺の弟！つーか、あんな大声で言ったら、ブルーベリージャムの部下にばれるじゃねーか！」

「ブルージャムな!!確かにポルシエーミの野郎につかまってるぜ。」

「よし、殺しに行くぞ！エース！サボ！」

「ちよつと待てよ。ここで行ったら、海賊貯金のごとくバレちまう。とりあえず、金を移そう！」

んー、まあ原作通りなら死なないから、いつか!

「分かった。けど移し終えたらすぐに助けに行くぞ!」

そして、海賊貯金を別の所に移し終えたら、サボが

「ルフイって奴、まだ口を割ってねえんだよ!」

「なに?!」

「よし、助けに行くか!」

「いい加減に吐きやがれ!クソガキが一丁前に秘密を守ろうとすんじやねエよ!」

「いわねえ……」

「じゃあもういい。死ねよ。」

「サンダーシヨック!」

ポルシェーミを動けなくする。

「ん?!なんだ、体が動かない。」

「誰を殺すって？調子乗るなよ、デブ野郎！」

「お前、悪党のリファアードだな!!」

「大丈夫だ。顔を覚える必要はない。今すぐここで消えるからな。サンダーバズーカ
!!」

両腕をゴムゴムのバズーカみたいにポリシエーミにかざし、一気に電気を手の甲から
放出する。

するとポリシエーミは空の彼方にぶっ飛んでいった。

周りのモブ共はサンダールームを作り、感電死してもらった。

「い、いつ見ても凄い能力だな。」

サボが呟く。

「恐がった。死ぬがどおもった。」

「うるせえな。いつまで泣いてんだ！おれは弱虫も泣き虫も大っ嫌いなんだよ！イライ
ラする！」

するとルフィはピタリと泣き止む。

「ありがどゥ。助けでぐれで。ウウ……。」

「てめェ！」

「おいおい、礼を言ってるだけだ。」

「……だいたい何で口を割らなかつたんだ!!? あいつらは女でも子供でも平気で殺すやつらだ!」

「喋つたらもう友達になれねえ!」

「なれなくても死ぬよりいいだろ!なんでそんなに俺とダチになりてえんだよ!」

「だって他に頼りがいねエ!!!」

「!!!」

「ブーシャ村には変えれないし、山賊は嫌いだし、お前らを追いかけてなかつたら、おれは一人になる。一人になるのは痛いより辛い!!」

「おんなじような事を言ってるぞ、リファア」

「ああ。兄弟だからな。」

「サボとおれで話す。」

「実際は俺がパクつたんだが。」

「お前はおれに生きててほしいのか?」

「!?当たり前だ!」

「そうか、でも俺はお前みたいは弱虫は嫌いだしな。」

「弱くねえよ!おれは強くなるんだ。スゲエ海賊になるってシャンクスと約束したんだからな!」

「海賊!? お前が?」

バチバチ火花とんでます。

はい喧嘩はやめましょう。

「なー、ところでよ、おれは今までゴミ山に住んでたけど、今日から俺たち完全に命を狙われることになりそうだ。」

「そうだな、じゃあ、サボもダダンの家来いよ! 楽しいぞ! 汚いけど。」

「まじか? いいのか、ありがとうりファー!」

「な、な、何でガキがもう一匹増えてんだよォー!!」

「やあ、おれはサボ、ダダンだろ? よろしく!」

「サボ? 知ってるぞその名前、お前もクソガキだと聞いてるぞ!」

「そうか、おれもダダンはクソババアだと聞いてるぞ。」

「余計な情報持つてんじゃねエよ!」

おれら4人一緒に暮らすようになってから数ヶ月、兄弟の盃を交わした。

こいつらとの縁は切っても切れないものとなったのだが、最近日々に張り合いがない。

もうそこらの山の動物たちは倒したし、山の主の虎も倒した。

グレイターミナルにいる海賊たちも倒したから、サボが連れ去られることもないだろう。

そう思いながら、ダダンの家に帰っていく。

「なあ、皆、聞いてくれ。」

「[[ん?]]」

「おれ、この島を出ようと思う。知り合いたい人がいるんだ。」

はい、もちろん反対されました。

しかし、

「言つたら、俺の夢はこの世界の全てを見ることなんだ。お前らより先に海に行つてしまおうが、おれは先の海で待ってる。だから、頼む!この通りだ!」

といい、頭を下げる。

「まあ、お前の夢がそういうことなら、おれらが邪魔する訳にはいかないな。仕方ない、

「いぞー！」

「おれもいいと思うぞ。」

「いいぞー！」

「ありがとう！皆！早速だが、明日、出ようと思ってるんだ！」

「明日ー?!」

そんなこんなで皆に説明して、皆との最後の夜は終わった。

そして、おれは眠りについた。

神様再登場（笑）

「久しぶりじゃの。リファア」

「お前は、転生をさせてくれた神様か？」

「そうじゃ。」

「一つだけ頼みがあるんだ!!」

「そういうと思つて来たんじゃ。して、頼みとは？」

「ありがとう！さすが神様！頼みっていうのは実はシャボンディ諸島にいる冥王レイリーと知り合いたいんだ。覇気があまり強くならなくてさ。コツとかもつかめないんだ。このままじゃ、全然ダメなんだ。もつともつと強くなりたいんだ！」

「レイリーか。いいじやろう。そうなるように手配しておこう。しかし、今のお主のレ

ベルより強くなりたいとはな。力に驕らないで更に上を目指すとは。久しぶりの面白い転生者じゃ。」

「ありがとう！」

そして、だんだんと意識がなくなってきた。

気がつくと、朝になっていた。

起きると目の前にガーブがいた。

「じ、ジジイ?!」

「ん、おおりファーか。ようやく起きたのか。」

「どういうことだ? おれを待ってたのか?」

「ああ。なにか頼みはないか? なんだか急に頼まれたくなつての。」

なんかベタすぎないか、神様。まあ、いいや。

「じゃあ、おれをシャボンディ諸島に連れていってくれないか?」

「シャボンディ? よーし、任せとけ! 行くぞ!」

「お、おう。早いな、なんか。」

そうして、俺は皆に別れの挨拶をしてから、コルボ山を降り、フーシャ村で村の皆と

お世話になったマキノに挨拶をして、ドーン島を海軍の船で出航した。

海の上で過ごすこと3週間、シャボンディ諸島についた。

なぜこんなに早く着くかって？

海軍の軍艦には船底に海棲石があるのでカームベルトをおもいつきり横断できるんだ。

「着いたぞ。ここがシャボンディ諸島だ！」

島からシャボン玉が本当にでている。

前世では絶対に見ることができない、幻想的な島だ。

「ああ、ありがとう！」

「じゃあのー！」

「ああー本当にありがとうなー！」

ガープと別れて、俺はとりあえずあの店に行くことにした。

そう、13番グロープにある、シャツキーズぼったくりバーである。

あそこに行けばレイリーに会える可能性が一番高いからな。

ここは、21番グロープだから、ゆっくり歩いてくか。色々、島も見たいしね。

そして歩くこと一時間、ようやくついた。

シャツキーズぼったくりバー。

うわー、看板からして、ぼったくる気満々じゃねーかよ。

中に入ると、

「いらつしやい。あら？見ない顔ね。しかもまだ子供じゃない。どうしたの？道でも迷った？」

「あんた、シャクヤクさんですね。俺はレイリーという人を探してるんだが、分かります？」

初めはやはり敬語で挨拶しないとね。

最初が大事ってよく言うもんね。

「あら、かわいい子ね。レイさんなら奥にいるわ。ちょっと待っててね。呼んでくるわ。それとシャツキーでいいわ。」

「分かりました。ありがとうございます。」

そして、少したつたら、白髪の髪の長い人が出てきた。レイリーだな。

「あなたが、レイリーさんで間違いありませんか？」

「ああ。私がレイリーだ。ここらではレイさんと呼ばれている。私になにか用かね？」

「はい。お願いがあるんです。俺に修行をつけてくれませんか？」

「私が君に？んー、まあ最近暇してたからな、いいだろう。」

「さすがレイさん。良かったわね。」

「ありがとうございます！」

「君の名前は？」

「俺の名前はモンキー・D・リファアーといいます！よろしくお願いします！」

「ああ。しかしこの島では修行ができないな。……そうだな、私の知り合いのところでは修行しないかね？」

「知り合いのところ？どこですか？」

「アマゾンリリーというところだ。」

「おいおい、アマゾンリリーっていえば、ハンコックの島じゃねーかよ。」

「まじか、こんな早く会えると思わなかったな。」

「分かりました。」

「それじゃ出発は明日にしようか。船はこちらで用意する。支度を整えておいてくれ。」

「そう言われ、俺は支度のために外に出る。」

「とりあえず、無法地帯以外なら支度はできるだろう。」

数時間後

よし、もう支度は完了したし、まだ全然時間があるな。人間オークションでも行ってみるか。

原作で出てきたのは確か1番グロブの会場だっけ。
とりあえず、行ってみるか。

人間オークションについたら、もうオークションは始まっていた。
入ると

「5億で買うえー！ー！」

天竜人が人魚をちようど落としているところをみてしまった。
さすがにここで見逃すわけにはいかねえな。

とりあえず、会場の人達全員ちよつと痺れさせますか。

「サンダールーム！」

会場の大きさに調節して、司会と客と天竜人を電気で殺しておいた。そして人魚の首輪を覇気で取り、逃がす。

「あ、ありがとうございます。！」

「ああ。君は今すぐ逃げな。海軍が来るかもしれないから。」

「で、でも。」

「いいから、はやくー！」

すると人魚は急いで出ていった。

あとは中にいる奴隷を解放だな。

ふー。これで全員終わったな。

さてと、宿屋に帰るか。

「あ、ありがとうー！これで家に帰れる！」

「ああ。元気でな。」

たくさん礼を言われたし、満足満足！！

そして翌日

起きて、レイリーのところに行こうと思ったら、新聞が一面こんな記事で埋まっていた。

号外！！

天竜人殺害事件

先日、シャボンディ諸島で天竜人含む、計60人が殺害された。
原因不明の殺害。

世界政府は情報を集めています。

少しでも知っている人がいたら、世界政府まで連絡してください。

—————

あちゃー。

バレちゃったね。

まあ原因が不明なところを見るとまだ犯人は分かってないと言うことだな。

よし、ラツキ、いや予想通りだ！

とりあえず、レイリーのところにいこう。

「遅かったな。リファア、寝坊か？」

「いや、新聞を読んでて。」

「おや、あの天竜人のことだね？まさか、あれは君がやったのかね？」

「ば、ばれちゃいましたか。さすが冥王レイリーですね。」

「いや、今のはたまたまだよ。まあいい、そろそろ行くとするか。」

「は、はい！よろしくお願ひします！」

その後、レイリー、リフアーを乗せた船がシャボンディ諸島を出航した。

修行の始まり

シャボンディ諸島を出航してから一週間、女人国アマゾンリリーにいかうと思ひ、航海してゐる途中に海の方から九蛇の海賊船が来た。

グッドタイミング！と思つていたら、船の奥の方からカツンカツンと足音がたつた。出てきたのは、

「誰じゃ一体、わらわの通り道にこんな小舟を置いたのは！」

ハンコック様のおな——りりー。

「久しぶりだな。私だよ。」

「そなたはまさか！レイリーか！と誰じゃ?!」

「俺はリファア——つてんだ。お前はボア・ハンコックだろ？」

「!!!? わらわにむかってその口の聞き方はなんじゃ?!」

!!!
と言つて小舟に乗り込んで来た。

え、なんか俺まづい事言つたっけ?

「口の聞き方つていつても普段通りに喋つてるだけだ。キヤー! 蛇姫さまあー! と言つたか?」

!!!
もう良い。会話するだけ無駄じゃ。

わらわに見惚れるやましい心がそなたの体を硬くする! メロメロ甘風!!!」

やばい! おれはルフィじゃないから石にはなつちやうんだよ。

もちろんやましい心もあるよ!

そりゃ、だつてハンコックだよ、かわいすぎるよ!

おれは防御として、自分の体に電気を流し込み、脳の信号を数秒遮断した。

もちろん体内で能力を使っているだけなので、人からは見えないうようになってる。

電気つてやつぱり色んな使い道があるから、最強なんだよな。

!!!
「???! なぜ石化せぬのじゃ?! わらわの虜にならぬ男などおる筈がない。」

!!!
「ここは強がつてみるか。」

「けつ!! 誰がお前みたいいなデコ女を見惚れるか! お前なんかただデコが広いだけじゃねーかよ!」

「サンダールーム！」

おなじみのサンダールームです。

そして俺はハンコックの後ろに瞬間移動して、最高に固めた武装色の脚で蹴り飛ばした。

さすがにこれはKOだよな!?

「ゲホッ！カハッ！………。そなたは強いな。まさかわらわが負けるとは。」
「でもお前も中々だったぞ。まさか今の一撃で気絶しないとはな。覇気が強かったから、一発食らったら、おれも終わりだったな。」

「情けなど無用じゃ。負けは負けじゃ。」

「そうかい。」

なんかハンコック、性格変わってない？

こんなに素直だったっけ？

まあ、いつか。

「話の最中にすまないが、ハンコック。ルスカイナ島に行きたいのだが、いいかね？」
「ルスカイナ？ いいが、なんの為にあそこに行くのじゃ？」

「リファアの修行だ。あそこなら強い動物達がたくさんいるから。」

そうそう、シャボンディ諸島からここに来るまでの道中で、レイリーと親しくなった

んだ。

その影響かどうかは知らんが、レイリーが俺の事をリフアーと呼ぶようになったんだ。

だからおれもレイリーと呼ぶようにしている。

「レイリーは別にいいのじゃが、そやつは送らぬ。なぜ、そやつをわらわの船で送らないといけないのじゃ！そんなことより聞きたいことがひとつある。レイリーはシャボンデイ諸島に住んでいたのじゃろう？先日、……て、天竜人の殺害がシャボンデイ諸島で起こったのは知っておるか？」

「えっ!?送ってくれないの?」

「そなたは黙っておけ！目障りな！」

前言撤回します。

やつぱり性格がくそだわ、ハンコック。

あんなにかわいいのに……

なんか前世で性格悪くてかわいい子と性格良くてかわいくない子、どっちと結婚する?とかいってたな。

でも俺は断然、前者の方かな。

「あー、あの犯人は知っているよ。」

「な、なに?!」

「その犯人はここにいるリファーだ。」

「あー、あれか。天竜人のやつが気に食わなかったんだ。」

「……では天竜人に手をあげたのは事実か。」

「ああ。」

「まだ、まだそんな大バカ者がこの世界におったのか!!」

「なんでお前がそんなこと言うんだ? 関係ないだろ。」

「そなたには全て話そう。……わらわと船にいるマリーとソニアはその昔、天竜人の奴隷だった。」

「……お前が?!」

「そなたは。……奴隷であつたわらわを、蔑むか?」

「なに言つてんだよ。そんなんで蔑む程、おれは糞みたいな奴じゃないし、更におれは天竜人のこと嫌いなんだよ。」

「……ふふふつ。そなたを気に入ったぞ!! ルスカイナまで送つてやろう!」
「まじかー!! ありがとう!!」

その後、ハンコックとレイリーと共に船に乗り、ルスカイナ島まで行った。

その後にハンコックたちはアマゾンリリーに帰っていき、今はおれとレイリーの二人

だけである。

「ここが、ルスカイナ島！」

「大昔、ここには国があつたという。だが生存競争に人は破れた。苛酷な自然、天険の地だ！猛獣の数が夥しいな！とても数えきれない。」

「レイリーはすげーな。数まで覇気で分かるのか！」

「君もそうなるんだよ。いや、君は私以上の才能を秘めている。」

「そ、そ、そうなのか！」

「まず、君には覇気の修行をしてもらう。今の君の覇気のレベルだと、海軍の大将や中將に手も足もでないだろう。これを第一に鍛える。」

確かにジジイに勝てなかったからなー。

おれ、エース、サボの三人でも勝てなかったし。

「だけど、おれ、覇気の鍛え方とかさっぱりなんだよ。コツとかないのか。」

「いいか、リファア。覇気とは全世界の全ての人間に潜在する力なんだ。気配、気合、威圧、それら人として当たり前の感覚と何ら変わりはない。ただし大半の人間はその力に気付かず、あるいは今の君みたいに引き出そうにも引き出せず一生を終える。」

「そうだな。俺の場合、覇気はまだ少しかじった程度だからな、本当の覇気使いとは呼べないだろうな。でも引き出せないで死ぬなんて絶対嫌だな。コツとかはないのか？」

「いいか、よく覚えておけ。『疑われないこと』それが『強さ』だ！」

「疑われないこと……なるほど、確かに言われてみれば半信半疑だったかもしれない！」

「疑わなくなったら覇気のレベルはおのずと上がる。まあ、私の助言はここまでだ。覇気の修行の次に能力の修行だ。ロギア系ビリビリの実の電気人間。この能力は鍛え上げたら相当のものになるだろう。今の君の技はレベルも低いし、レパトリーも少ない。もつと強くしないと能力者とは言えんな。それに新しい技も考えておいた方がいいな。この森の動物たちは本当に凶暴だ。それに勝てるくらいの技を身に付けるんだ。」

「今の技を強くして、更に新しい技を考えるのかきつい修行になりそうだな。でも、分かった！俺、頑張るよ！」

「うむ。その次に海軍の六式だな。これも鍛えること。六式は鍛えることで本領発揮ができる。私は使えんが、君なら出来るだろう。頑張りなさい。それに君の持っているその刀。最上大業物の電神剣だな。電気を操る能力者が持つと、破壊力を増すという刀。初めて見たな。剣術は私も知っているので、教えよう。まあ、うまいとは保証出来んが。その刀は雑魚をまとめて、片付けるときに使うといい。まあこのくらいだな。……そうだな。こんなに鍛えるんだ。けっこうな年数はかかるが、9年だ。9年で君を鍛え

上げる。」

「9年か、分かった。ありがとう！レイリー、俺さ最近夢が出来たんだ。」

「夢?!」

「おれは海賊王になりたい！」

やっぱ、この世界に生まれてきたんだから、海賊になるなら頂点を目指さないと。

神様から貰った特典も台無しにはしたくないな、やっぱやるならてっぺん取らないと。

「ふん。君の人生だ。好きに生きなさい。少し、森を歩こうか。森のレベルが分かるだろう。」

レイリーについていくと、森に入った。

歩き終えた感想

森の中ではコルボ山にはいない動物たちが、うじゃうじゃいるし、もうマジでやばいって。

本当にルフィここで2年間も過ごせたのが、凄い。
尊敬しちゃうわ。

コルボ山の大虎なんか、かわいく見えるよ、ほんとに。

原作にも出てきた、安全な場所の大根みたいな木のところも紹介された。ここを寝床とするらしい。

「よし！修行を始めるぞ！リファアー！」

「分かった！よろしくな！レイリー！」

そして、修行という名の地獄の生活が始まった。

修行中のある一日

毎日毎日、来る日も来る日も修行に打ち込んだ。

覇気、悪魔の実の能力、六式、剣術、マジできつすぎる修行。

レイリーの目を盗んで今はサボっております。

最近、ハンコックが食事を届けに来てくれる。

ハンコックは毎日来たいようなんだけど、レイリーが注意して、一年に2、3回だけ来ている。

あの感じだと、どうやら俺に恋心を持ってしまったらしい。

まあ、嬉しいっちゃ嬉しいんだが、もうこれ原作ぶち壊しじゃね？

ハンコックいないとインペルダウン入れないじゃん、ルフィ。

でも、なっちまったなら仕方ないな。

原作ぶち壊して行くしかないな。

……！おつともものすごい血相を変えて、レイリーがこっちに来てるよ、怖いー。

精神を統一してたと嘘をつこう、うん、これしかない。

修行しないと、後で怖い思いするからな。

じゃあ、修行を始めますか!!

今日もまた、地獄の始まり。

こういう地獄に化した日々を積み重ね、ある最強の人物が誕生していく。そう、後に「世界を揺るがす男」と呼ばれる、人物が。

その男の名はモンキー・D・リファア。

後に語られる彼の名は「電（いなずま）の王　リファア」

初陣

9年後

「ふー。今日で終わりか……。なんか長いような短いような9年だったな。」
終わりました！地獄の修行。

修行の成果は自分でも疑うくらいに凄いことになってるよ。

おれ20歳で世界最強になってるかもしれない（笑）。

………すいません、調子のりました。

覇気レベル、悪魔の実の能力、六式のどれをとっても自信あるな。

それに加えて、剣士の技術もあるよ。

もう、かなりの奴になったと思うんだよね。

とりあえず、この島でやることは終わったな。

アマゾンリリーに行つて、ハンコックに挨拶でもするか。

ハンコック仲間になってくれたら嬉しいんだけど。

あんな可愛い人を仲間に来たらなあー。

毎日、目の保養になるよね！

アマゾンリリーに行くためにレイリーが残していつてくれた小舟に乗り込む。

アマゾンリリーのログポーズはあるから、確かこれに沿って行けばいいんだよね。

おれは航海術は少しかじった程度だから嵐とかにあつたら、間違えなく死にますよ。

まあ、ルスカイナからアマゾンリリーまではカームベルトだからアマゾンリリーのログポーズをたどって、船を漕ぐだけでついちやうけど。

でも、船を漕ぐのはめんどくさいなあー。

そうだ！能力使えばいいんじゃない！

9年も修行したのよ。

悪魔の実を鍛えれば鍛えた分だけ強くなるってことを身をもって実感しましたよ。

しかも、ビリビリの実には本当に色んなことに使えるんだよね。

俺は船尾の方の海に手をかざし、電砲よりも強力な技を発動した。

「電撃砲!!」

電撃砲は電砲よりも破壊力も範囲もでかい。

まあ、今の俺の技の中で結構弱い方の技なだけだね。

これで一気にアマゾンリリーだぜ！

見たか、サニー号！

クードバーストをパクらせていただきました。

宝樹なんていらななんだよ！

数分でアマゾンリリーについた。

着地時の影響で、レイリーから貰った船が木つ端微塵になっちゃった。

おれは電気化して回避したけどね。

アマゾンリリーで挨拶したら、シャボンディ諸島でも行こうかな。

あ、でも俺、どうやってシャボンディ諸島に行けばいいんだ?!

半年前にレイリーが帰っちゃったし。

ログないし、船もないよ！

ハンコックに頼むしかないか。

ここで強くなった技を披露する。

「サンダールーム！」

今一度、説明をここで補足しておこうか。

サンダールームってのは感電や瞬間移動に使う技です。ただ感電に関しては武装色を使えるやつは効かないんだ。

まあ説明はこのくらいにして、俺はサンダールームを島くらいの大きさに調整して、

九蛇城の中のハンコックの部屋に入った。

そう、地獄の修行の末に島の大ききくらいならギリギリ作れるようになったんだ。
チートだね。

これでハンコックを驚かせてやろう。

「やあ、久しぶり。ハンコック！」

「だ、誰じゃ!!?.....ん?そ、そなたはリファアか!!久しぶりじゃな!

どうしたのじゃ?なにか用か?見つかったらレイリーに怒られるのでは?」

「んーと、修行は今日までなんだ。実際、レイリーは半年前、シャボンデイに帰ったし。そろそろこの島を出ようと思つてな。とりあえずシャボンデイ諸島に行きたいんだが、そこでハンコックにお願いがあるんだ。おれをシャボンデイ諸島まで送ってくれないか?」

「そなたが望むのならわらわはどこへでも行きます!」

「まじか!ありがとうな!ハンコック!!お前やつば、大好きだ!」

「(大好きと言われた!まさかこれが結婚?!)」

「結婚してもいいぞ!お前となら!」

「な、なに?本当か?!ん?そなた今、わらわの心を?!」

「ああ、修行の成果だ!心も読めるようになったんだ!」

「そ、そうなのか。強くなったのじゃな。それにわらわとけ、け、け、け、け、け、け、け、結婚?」

「まあ、それなんだけど、結婚の前におれと一緒に世界をひっくり返さないか?」

「それはわらわを誘っておるのか? 良いのか? わらわが最初の船員で。」

「ああ。お前しかいないんだ。頼むよ、ハンコック!」

「そなたが望むなら、分かった! わらわも共に行こう!」

「よっしゃ! 一人目だ! よろしくなハンコック!」

「うむ。よろしくじゃ! リファア!」

えっ!? 原作はどうしたかって? そんなの知るか!

俺がこの世界に来たんだから、ぶち壊して行くぜ!

海賊王には俺がなるんだからな。

ルフィよ、貴様におれは越えられん!

「じゃがりファア。この島は…… どうすればいいのじゃ?」

「ああ。それなんだが、色々と考えてみたんだ。で、結果的にこの島は俺のナワバリにすることにした! 襲ってきたやつは例え海軍であろうともフルボッコだ! 電伝虫で電話一本貰えれば、ビリビリの実の能力で瞬間移動しまくればすぐにここに來れるし。」

九蛇の人達を集めた後に、俺は自分の海賊旗を九蛇城のてっぺんに掲げた。

俺の海賊旗はドクロが書いてあって、その背景に「電」と書いてあるすごくシンプルなマークだ。

「今日からこの島は俺のナワバリにする!!」

「よいか! 皆のもの! わらわはリファアと共に行くことにした! 九蛇海賊団からわらわは抜ける! 新しい船長はソニアとマリイにする!」

「!!! そんなあー! 蛇姫さまあー!」

「よいよな?!」

「!!! もちろんです! 蛇姫さま!」

「じゃあ、そろそろ行くこうか。」

「そうじゃな。」

おれとハンコックは九蛇の人達と共に九蛇の海賊船でアマゾンリリーから旅立った。

船に乗ること一週間。

シャボンディ諸島に到着した。

「それではここでお別れだからな! お前ら送ってくれてありがとな!」

「ソニア！マリー！国を任せた！わらわはリファアと共に海賊をやることに決めた！」
「ええ、姉さま。ご武運を祈ります。」

別れをサクツと済ませて、おれとハンコックは島に入る。

とりあえず、13番グローブに向かおう。途中で偉大なる航路饅頭、通称グラマンを買つて、シャツキーへのおみやげにする。

そして、ハンコックと雑談をしながら歩いていたら、もうシャツキーズぼったくりバーについた。

やっぱ仲間がいると、飽きないわ。半年間、一人つきりだったからね。

いいね、海賊人生！

楽しくなってきたなあ！

そんなことを思いつつ、バーのドアを開ける。

「こんにちわー！」

「いらつしやい。……あら？モンキーちゃん？久しぶりね！それとハンコック？」

「そなたはシャツキーか。久しぶりじゃな。」

「あ！これどうぞ！おみやげです。」

「これはグラマンね。ありがとう。」

「ところでレイリーいますか？」

「レイさんなら、そこらへんをうろついているか、オークション会場にいるわ。」

「そうですか！ありがとうございます！あ、ハンコックは待つてるか？」

一応、ハンコックに聞いてみる。

「いや、わらわも行くこう。」

「そうか。じゃあこれで失礼します。」

「早いね。いつてらっしやい。」

そういつて、入って早々、店を出る。

なんかシャツキーに悪いね。

オークション会場だから、一番グローブに向かって、おれとハンコックは歩き始める。

気がつくと、隣でハンコックがブルブル震えてる。

「大丈夫か？ハンコック」

「だ、大丈夫じゃ。」

「まあ俺がついてるんだし安心しろよ。天竜人はいたらブツ飛ばせばいいし。」

「あ、ありがとう、リファア。」

話をしていたら、一番グローブについちやった。

そして俺らは人間オークションの会場に入る。

ここに来た理由は三つ、一つ目はレイリーに会うこと。

二つ目はハンコックをびびらせているクズどもを排除すること。

三つ目は、クズを倒して大将を呼び、名を上げること。

「よし！行くか！」

「どうも皆様!!今回も良質な奴隸たちが勢揃いでございます!それではさっそくオークシオンを始めましょう!!!」

おー!!懐かしいな!この雰囲気!

司会もやっぱりあいつになってるな。

9年前と違うやつ。

なんだっけ?名前?えーと、デイスコくんだっけ?ドフラミンゴに裏切られる奴だよね。

「おー、始まつてるねー。」

「リファー、とつとと倒してレイリーを探さねば。」

「ああ。そうだな。」

と言って、おれはVIP席に座っていた天竜人の前に立つ。

今回は天竜人は二人いるので一人を倒そう。

「なんだえ？貴様。無礼だえ。」

「どっちが。とりあえず、お前を殺さないと大将が来ないんでね。恨みはないが色んな人の願いにおれは応えんとするよ。お前にはこの技で充分すぎるだろう。電撃砲!!!」

一人の天竜人が吹っ飛んでいった。

まるで口？ツト団みたいだね。

星になってるよ。

「海軍大将と軍艦を呼べえ!!目にもものを見せてやる!」

よし、いいぞ。大将を呼べ!!

早く来いや!

もう一人も用済みなので霸王色で気絶させとく。

「二に、逃げろー。海軍本部から軍艦と大将が来るぞー。」

「り、リフアー!!そんなことを公してはまずいぞ!!わらわたちも逃げよう!大将が来ては叶わぬ。」

「なに言ってるんだよ、ハンコック。大将なら俺がぶつ倒す。未来の海賊王の船員だぞ。そんな小さなことで慌てるな。」

空島のルフイの言葉いただきませ！ちよつと自己中つばい言葉だけどね。

少し経つた後に

「やれやれ、やはりリフアーだったか。私は金も盗んだから帰るとするか。おお！ハンコックもいるのか！何しとるこんな所で！」

「レイリー！久しぶりだなあ！そろそろ行くので別れの挨拶にと来たんだ！」

「わらわはリフアーと共に行くことにしたのじゃ！レイリー、貴様にとやかく言われる筋合いはないぞ！」

「そうか。わかつた。それにこれから大将がくるな。だが、今の君なら問題なからう。」

「ああ。あと小舟を一隻貰いたいんだが。」

「小舟でいいなら3番グロープにあるはずだ！」

「わかつた！じゃあ、そろそろ行くから、本当に色々ありがとう！レイリー！」

「ああ。頂点まで行つてこい!!!」
会話を終えて、おれとハンコックはオークション会場から出る。
すると

「いたぞお！今回の主犯！捕らえろ！」

海兵がたくさんいますねえ。

まったくおれとハンコックにこの数とは暇してるねえ海軍。

だが、何人束になってかかって来ても、おれには勝てねえよ。

腰に手をかけ、電神剣を抜く。

「電の舞、電羅剣舞!!」

大きい電気の竜巻が出現し、海兵全員一気に倒した。

この技を簡単に説明すると、電神剣で竜巻をつくりそれに俺の能力で電気を電神剣を使つて間接的に竜巻に流し込む。

そうすることで竜巻から出ようとしても、体が痺れて動けずに切り刻まれるという仕組みだ。

「さてと、それじゃあ行きますか!」

「す、すごい。本当に強くなったのじゃな。」

「ああ、まだまだこんなの本気じゃないよ。3番グローブに行こうか。」

歩くこと数分

突然、

「んんん。遅いねえんんん。速度は重さ。光の速度で蹴られた事はあるかい。」

その言葉と同時に腹部に重い蹴りを食らい、吹っ飛んだ。

「カツ！ゲホツ！油断した。光なんかで蹴られたことはないよ。お前とは始めて会ったからな。貴様は大将黄猿だな。」

「お前はくく？謎の新星と言ったところかいくく？それに海賊女帝ボアハンコック！これはどういう風の吹き回しだくく?!」

「わらわはそのリファアの仲間になったのじゃ！七武海はやめる！」

「なるほどおくく。称号剥奪だねえくく。」

「ハンコック!!少し下がっていた方がいいぞ！おい、大将！そろそろ戦闘と行こうじゃねえか！格の違いを教えてやるよ。」

「わっしが負けたら海軍の顔が立たんでしょくがく！」

「サンダールーム！」

黄猿相手に瞬間移動なしは無謀すぎるからな。

とりあえず、サンダールームを作る。

「どう足掻こうともわっしは光。追い付けるわけないでしょくが。」

と言つて俺の背後に光の速度で回つて来たので、

「お前は瞬間移動というものを知らねえのか。」

俺も瞬間移動であいつの後ろの方に回る。

この世界では光の速度より瞬間移動の方が早いのだ。

黄猿は戸惑っているようで、その隙に俺は嵐脚に電気を加えた技を黄猿に放つ。

「電脚!!」

「グッ!!」

もちろん覇気付きだよ。

じやないとロギアなんて相手にできないからね。

流石に一回でやられる筈もなく、あいつは起き上がってきた。

「やるねえ〜。けどもう終わりだよ〜。八尺瓊勾玉!!」

ジャンプして両手の親指と人差し指で円をつくり、そこから無数の光の弾丸を撃ってきた。

「たしかに速いが、俺からしたら止まってるようにしか見えないな。」

サンダールーム内にいるので俺は黄猿の背後に移動して、腰に手をかける。

「なに〜〜!?」

まったく自分の命の危機だったのに、そんな悠長な口調しやがって。

「食らえ!!」

電神剣を抜く。

「式の舞、電光の一閃!!」

この技は強力な電気と覇気を込めた一閃。普通なら当たったら確実に相手を死に至

「さすが、今回は手を抜いた。」

「グワアアア！」

黄猿の腹の横を狙い、抉ることで重症にさせた。

さすがにここで死んでもらっては困るのですね。

「お前にはまだ死んでもらっては困るんだよ。その傷くらいなら全治一年つてどこか。」

「「黄猿大将!!」」

「そいつをもつてマリンスフォードへ帰りな!!それともう一つ!俺は海賊だ!!!ハンコックは俺の仲間になったと、上層部に伝えておけ。」

「「.....くっ!医療班!急げ!」」

「じゃあ、行くか!ハンコック!」

「うむ。」

3番グロープに行き、レイリーから貰った小舟に乗り込み、シャボンディ諸島を出航した。

翌日、船の上にて、

「ふわあく！おはよう、ハンコック！」

起きたら俺より先にハンコックが起きていた。

「リファアー!!起きたのじゃな!!新聞を読んだか?!

「い、いや、俺はまだ起きたばかりで、」

「そうか!これが今日の新聞じゃ!!」

大将敗れる?!

昨日、とんでもない事件がシャボンディ諸島で発生した。内容は天竜人を殺害した人物を大将が捕らえに行ったのだが、大将までもが破れてしまった!!謎の超新星の登場か!!!?更にその仲間にはかの七武海であった人物、強き気高い、あの人物までも!!!?

船長、電の王・リファアー

船員、海賊女帝ボア・ハンコック

DEAD OR ALIVE

ボア・ハンコック

4億5000万ベリ

—————

「よっしや———！」

これだよ！

これ待ってたんだ！

始めからこの賞金額は半端ないねえ！！

「ほう！わらわもこんなに上がったのか！」

ハンコックも嬉しそうな表情してますなあ！

「よーし！ゴホン！俺達の手配に祝って乾杯だあ！」

二人だけなのに、随分と賑やかな、宴を始める一行だった。

彼らの次の目的地は水の都・ウォーターセブン。

始まりと終わり

一日前、海軍本部にて

センゴク元帥の部屋

「まったく天竜人を手にかけるなど何処の命知らずだ!!」

「まー、そう怒るなセンゴク。今頃、ボルサリーノに捕らえられてる頃じゃい。バリツ!!」

「ガープ!! 貴様いつまでここでセンベイを食べている! とつとと仕事しろ!!」

「ガープとセンゴクが話し合いをしているなか、いきなり部屋ドアが強く開いた。

「し、失礼します!!」

「ノックくらいせんか!! それで、なんの用だ!」

「先程、黄猿大将の軍艦から連絡が!」

「捕らえたか。」

「い、いえ。連絡は黄猿大将と犯人が交戦した結果、大将が犯人に破れました!! 大将は腹

部を挟まれ、全治一年。また、犯人は仲間と思わしき人物と共に逃走。その仲間は王下七武海、海賊女帝ボア・ハンコック!!そして、その海賊女帝が呼んでいた犯人の名前はリファーと、連絡がありました。以上です!」

センゴクは手で頭を抑え、ガープは驚愕の顔つき。

「黄猿がやられただど!!海軍本部大将だぞ!!なぜ手を抜いたんだあいつは!!それともその実力が黄猿以上なのか!!クッ!.....」

「なん、じゃと、り、リファーと言ったか?」

「はい!」

「ッ!!あの馬鹿め!生きておったなら大人しくワシの言うことをきいておればよいものを」

「どういうことだ?ガープ。」

「そいつは、リファーはワシの孫じやい。」

「!!!家族揃いも揃って。直ぐに手配書を作れ!!ボア・ハンコックも称号剥奪!新しい賞金額をつけろ!」

「金額はどのように致しますか?」

「犯人は7億!ボア・ハンコックについては4億程度にしておけ!大将を凌ぐ者に加え、あの女とはな。この先の海は荒れるぞ.....」

そして、また手で頭を抑えるセンゴクであった。

ここはシャボンディ諸島3番グローブの沿岸付近の木の陰

「行ってしまったわね、モンキーちゃん。」

「ああ。」

「あら、レイさん泣いているの？涙なんか流しちゃって。」

「リフアー。あいつを見ると、かつての

ロジャーを思い出す。」

「モンキーちゃんかっこいいものね。」

「強くなったものだ、9年前まではろくに覇気すら使えなかったというのに、大将を退けるのは。」

「私、やっぱモンキーちゃんのファンだわ。」

そして翌日、リファアの手配書が入った新聞が全世界に配布された。

「ここは新世界のとある海域

「お！オヤジーー！これを見てくれー！！」

「んー？どうしたあ、エース。朝から騒々しい。」

「ここ、これを見てくれ！」

「これは今日の新聞じゃねえか。！！！！？」

「モンキー・D・リファア。俺の兄貴だ。何の音沙汰もねえから、もうとつくの昔に死ん

だと思ってたが。生きてたんだ！！」

「初頭手配でこの金額か。グララララララ！！面白くなってきたじゃねえか！それにエースの兄貴となると一度会ってみてえもんだな。長生きしてみるのも悪くねえ。」

「よかった！本当に生きててくれてよかった。もうとつくに死んだのかと！」

「グララララ！！こいつ、シャボンディで天竜人を殺した上に大将を倒してやがる。実力も申し分ねえな。」

「リファアー!!いつか会おう!!この広い海の上で!!!」

「ここは東の海のゴア王国・コルボ山。

「る、ルファイアー!!大変だー!!」

「ん?どうした、ドグラ?」

「今日の新聞、凄いことになってるぞ!とりあえず、これを見てくれ!」

「ん?この名前は!?り、リファアー!?!随分と顔が変わっているが、間違えない!!リファアーだ!!!」

「リファアーの奴、生きてやがったんだ!」

「ははは、なんだよ金額は!さすがリファアーだ!すつげええ!リファアーが一番、サボとエースが二番か!あと少しで俺も!よーし!頑張るぞ!!!」

そしてここはリファアーたちのいるW7

「よっしやー！ついたぞ！ウオーターセブン!!」

いやー、本当に長い航海だった。

食料なんかすぐに底をついて、俺の能力で魚を釣って、電気ので焼いて食べての毎日だったよ。

小舟だから余計に航海が長くなっちゃったし。

船を買うためにシャボンディで天竜人から1億入ってるケースを5個取ってきたんだ。

「ふー、ようやくついたのか。長かったの。小舟で航海するわけにはいかんし、ここです、船を買った方がよさそうじゃの。」

「そうだなー。じゃあ俺が4億持ってガレーラカンパニーに行つて、船の事を聞いてくるから、1億やるからハンコックは街に行つて、服とか食料とかを買つておいてくれなにか？あと、それ終わつたら、宿取つておいて！」

「な、なぜじゃ？わらわもリフアーと共に行きたい！」

「いや、まだ俺らの手配書が出たばかりだから、二人で行動するのはよろしくないな。賞金狩りに会つたらメンドクセエ。この島にいられなくなつたら本末転倒だよ。だから、お願い！」

「むーリフアーの為。なら我慢。」

「いいか！ハンコック！なるべく顔を隠しながら街を歩くんだけぞ！」

「うむ。分かった。」

「このフード付きのマントを着てれば大丈夫だ！二つあるから、おれも着れるな。」

「リファアとペアルックじゃ!!!」

「うん。まあ、そうなるね。それじゃ、そろそろ行くね。」

「サンダールーム！」

島の大ききのサンダールームを作り、ガレーラカンパニーの前まで瞬間移動する。

ガレーラカンパニーの前に行くと、大きく1と書いてあるドアが目に入った。

「なんだつけ？ここ。9年もワンピース読んでないと忘れちゃうよ。まあ、入ればわかるか。」

工場の柵を乗り越えようとすると、いきなり人が飛んできた。

「おっと待つんじや。よそ者じやな？」

額を手で押さええようとしてきたから、後ろにバックすることで避ける。

「自分から下がってくれたか。工場内は関係者以外立ち入り禁止じや。」

「あつ、そうだったの。ごめん。」

「フードを被つてるとだれだか分からんな。」

「あー、このフードは取っちゃいけないんだ。それよりお前、今の移動方々。」

「ん？あー、いきなりダツシユで現れたから驚いたか？ワシはここでは山風と呼ばれる。カクじゃ。」

「いやいや、今のはダツシユじゃなくて剃だろーよ。まあ、どっちでもいいや。そんなことより、俺は旅人なんだが、船のカタログとかくれないか？」

「!!（こいつ、剃を知ってる?!まずいな、消しといた方がいいのか？あとでルツチに相談じゃな。）ああ、カタログならあるから、少し待つとれ。」

「ンマー。いや、その必要はない、カク。」

「アイスバーグさん？」

「カタログなら俺が持ってきた。カク、お前は仕事に戻れ。」

「了解じゃ。」

と言つて、カクはこの場を後にする。

んー、あいつどつかで見たことあるんだよな。

あとこの町にCP9っていうやつ出てこなかったっけ？

確か、リーダーが化け猫のルツチだったよな？

ん？カクもたしかキリンで仲間だったよな。

じゃ、あいつも敵か。

後で痛い目見せてやろう。

「ンマー。おい、お前。カタログならこれだ。」

「ああ。ありがとう。」

カタログをめくって見てみるがなーんかいいのがない。

「なー、アイスバーグさん。ここで自分流の船を作りたいんだが。」

「金が結構かかるが？いいのかわ？」

「多分、大丈夫だ！シャボンディで天竜人から結構盗んだから、俺の懐に4億あるから。服の中からケースを取りだし見せびらかす。」

「これで海賊船を一つ頼む。大型の船で色は黄色で船首は雷神をモチーフにしてくれ。帆には電と書いてね。」

「海賊船？電？……まさかお前は海賊の電の王リファーか？」

「あ、やべ。結局バレるのか。まあ、そうなればフード被る必要ないな。いかにも俺がリファーだ。」

と言い、おれはフードを取る。

「おい、カリファ。」

「ええ、調査済みです。」

電の王リファー

海賊女帝ボア・ハンコック

2人の賞金額を有し、総合賞金額、11億5千万ベリ。シャボンディ諸島にて大将を打ち破った者に、元王下七武海がいる、現在二人組の海賊、電の海賊団です。」

「そうか。よくきたな。さっきの頼み、受け入れよう。大体、一ヶ月あれば完璧に作り終わる。」

「まあ、そんならいか。分かった。俺たちは街の宿屋に止まるから、何かあったら、来てくれ。」

「そう言い終わり、カリファが帰って、アイスバーグも帰ろうとしていたので

「アイスバーグさん。サイファールには気を付けな。」

「!!? どういうことだ?」

「おれも詳しくは調べて見ないと分からんが、少なくともここに、ガレーラカンパニーにはいるぜ。」

「…………… そうか。ありがとう。やはり狙いは、」

「プルトンの設計図だろうな。」

「!!? お前はどこまで知っているんだ?」

「さあね。だがあんたの辛い過去と解体屋フランキーとの関係は知っている。」

「…………… そうか。」

「それじゃあそろそろいくよ。新しい情報が入ったら教えにいくからさ。」

「ああ。色々世話をかけるな。」

おれは見聞色で宿にいるハンコックを見つけ、瞬間移動して、その場を後にした。

――
その夜

「ルッチ。面倒なやつがこの島に来たそうじゃ。」

「カクか。面倒だったら消してしまえ。俺らCP9の任務の目的はプルトンの設計図だ。」

「しかしじゃ。相手が7億の首となるとワシとて勝てるかどうか。」

「7億？電の王のことか？そうか、確かに任務の邪魔だな。長官に連絡を取る。」

「了解じゃ。」

その後、CP9長官スパンダムが海軍大将二人を動かすことはまだ、誰も知らない。

—————

翌日

「ふあ~~~~~。」

おはようございます、リファアでございます。

今日はなぜか分かんが早く起きたな。

なんかこう、胸騒ぎがするんだよな。

「り、りいふあ〜。」

うん、隣でハンコックが寝言を言ってるわ。

可愛いなー。

あ、ダブルベッドの隣ね。

もうベッドの上で男と女が一緒に寝たら、どうなるか、分かるよね。

まあ、ご想像にお任せしますが。

「にしても、今日は嫌なことが起こりそうだなー。」

とりあえず、朝の支度を済ませて、宿の外に出る。

海を見たいから海岸に行ってみようか。

散歩がてら、海岸に行くと、広い海が広がっていた。

だんだんと霧が晴れ、奥の方に海軍の軍艦が二隻見えた。

一応のため、見聞色で見してみると、一隻には大将・赤犬、もう一隻には大将・青雉がいるのが分かった。

「……………は？」

ちよつとちよつとちよつと、どゆことよ？

なぜ大将が二人もこんなところに？

流石にこんな島であいつら二人と戦ったら、ウォーターセブンが危ないぞ。

どうしよう？

よし、とりあえずハンコック起こそう。

おれは決めたらすぐに行動に移すタイプなのだ。

すぐさま宿に行き、ハンコックを無理矢理起こす。

「ん？なんじゃ？リファア？まだ早いぞ。」

「そんな悠長なこと言ってられねえ!!! 大将が、二人も来やがった。」

さすがにこの言葉で状況の不味さが分かったみたいで、直ぐに顔を真面目な顔へ変える。

「それで、リファア。どうするつもりなのじゃ?」

ハンコックが着替えながら言う。

まあ、正直ハンコックの着替えは何回も見てるので互いに恥ずかしがることはない。「そうだな、まずこの島で戦ったら、せつかく綺麗なウォーターセブンが粉々だ。それだけは避けたいな。無関係な人達も死ぬ可能性が出てくるし。ぶっちゃけ逃げるが勝ちっていうやつかな?」

「リファアが言うなら間違えはないじゃろう。」

「じゃあ、行くぞ!早くしないと、あいつら来ちゃうから。」

と言って、半ば強引にハンコックを宿から出す。

船がないと動けないので、昨日停めた小舟のある岬へと足を進める。

岬につくと、先に海軍がいた。

「えっ!?!待ち伏せ?」

すると奥から、大柄な男が出てきた。

「貴様らはここで終いじや。観念せい。海賊が。」

「!!お前は大将赤犬か!!それに奥で寝てるひよろり男、青雫か!!」

「どうせるのじや?リフアー?」

「まずいな。ここまで悲惨な状況だとは思わなかった。原作を知っている以上、この島での大きな戦いは避けたいしな。分かった。大人しく捕まるよ。」

「なっ!?!何を言ってるのじや、リフアー!!そなたなら大将の二人くらい、倒せるであろう?!!」

「確かに俺ならこいつらには勝てるかもしれないけど、町が残る筈がない。シャボンデイの黄猿の戦いとは訳が違う。今回は二人もいるんだ。しかも黄猿のような速さが取り柄な奴らじゃないからさ。」

こうして、あっけなくおれとハンコックは海軍に捕らえられた。

俺らは、インペルダウンに投獄することになった。

彼らはインペルダウンの中でもLEVEL6に幽閉された。LEVEL6には政府から存在を揉み消された囚人たちがいるフロア。

伝説級の危険人物などが幽閉されているため、LEVEL6 そのものの存在も隠されてる。

しかし、そのLEVEL6 から彼らは一年後脱出することになる。

ある戦争に参加するため、またある男を助けるため。

インペルダウンでの出会い

インペルダウンLEVEL6 にて

ふあ〜〜。

あつ、どうもお早うございます。

私リファアはインペルダウンにいます。

なぜかって？

それはね、色々とおつたんだよ。

まさか、俺の為だけに二人も大将が動くとは思わなかったよ。

まあ、そんなこんなで捕まっている訳ですやい。

ちなみにハンコックは一人用の牢に入ってるから下衆共の影響は皆無です。

？んん？、なんか新しい人が来たな。

マゼランの隣にいる、あの男。

髪型はいかにも大物の気配を醸し出してるようなオールバック。

そして、右手には黄金に輝くフック。

!!まさか!?あの男は!?

と、思っているとマゼランとその男が俺の牢に来た。

「よう、マゼラン。しばらくぶりだな。その人はここに入るのか?」

「ああ、そうだ。こいつはここに監禁する。こいつは元王下七武海で、アラバスタにて大騒動を起こした張本人。」

サー・クロコダイルだ。」

おぉー！

俺がこの世界で会いたかった人だ！

こいつをどうにか仲間に出來ねえーかなー。

うん、仲良くするにはまず挨拶からだよな。

「宜しくな。クロコダイル。」

「氣安く呼ぶんじゃねえよ。たまたま俺と同じ場所になっただけだ。その氣になればおれはいつでもお前を殺せるんだぜ。クハハハハハハハハハ!!」

するとマゼランが口を開く。

「おい、クロコダイル。勝手な行動は慎め。言い忘れていたが、俺にはお前をこの場で処刑する権限とその能力がある事を忘れるな!!!」

と言つてlevel6を後にしていった。

「チツ!!」

クロコダイルが唾を吐く。

「まあー、仲良くしようぜ！俺はお前に会いたかつたんだから。BW社長のクロコダイルくん。」

「!!!てめえ！なぜ知つてやがる。俺の計画は完璧だつた筈だ！」

「そもそも、完璧じゃなかったからここにいるんだろ。」

「!!!
クソが!! 黙れ!」

「まあまあ、俺はお前を怒らせたかった。仲良くしたいだけなんだから。それに脱獄の計画も練ってるから、俺と一緒に来る気があるなら、連れてくからさ。」

「!!!
……少し、考えさせろ。」

「あ、そうだった。……一つ言っておくけど、俺はお前の弱みを一つ握っているからな。」

「!!!
なんだと!!? それはあのオカマ野郎しか知らねえ筈だ!」

「いや、イワンコフからは聞いてない。しかし、俺にはそれが分かる能力があるというこ
とさ。」

もちろん、大嘘ですよ。

インペルダウン編を知ってるから言えることであって、俺はこいつの弱み自体は知らないんだけどね。

「!!クツ！仕方ねえ。お前について行ってやるよ。ただし一つ条件がある。」

「ん？なんだ？」

「俺の部下を連れていく。」

「なーんだ。そんなことか。別に構わないけど。そいつら航海術あるの？」

「いや、ただの戦闘員だ。」

「そ。でもお前はある程度は新世界の知識はあるだろ。」

「ああ。一度行ってるからな。」

「じゃ、クロコダイルは航海士兼戦闘員ね。」

「相変わらず呼び名は変えねえのか。好きにしろ。それより、脱獄の方法はどんなのだ？」

「ああ。脱獄の方法ね。覇気を使うんだけどな。」

「!!覇気だと!?!」

「うん。でも俺には覇気も能力も封じ込める枷と錠が今ついている。でもな、どうやらこの署長さんは俺の覇気の強さを分かってないみたいだな。俺の覇気は恐らくだが世界でもトップレベルだ。せめてあと5個くらいは枷や錠がないと俺を本当に封じ込めたとは言えないな。」

「つまり、お前はまだ覇気を使えるの?」

「お、さすが頭の回転が早いな。その通りだ。だが、今はこの枷や錠を壊せる程の強さで

はない。俺の覇気を大体一年間くらい貯めこめば多分だが壊せる筈だ。」

「なるほどな。しかし覇気が世界でトップレベルとは驚いた。お前一体何者なんだ？」

「おれか？おれはモンキー・D・リファアード。」

「!!シャボンディで黄猿を倒した【電】か？」

「王はどうした！王は!!!そこ大事なところじゃないの?!んー、まあなるべく仲良くしていこうや、クロコダイル！」

「チツ！仕方ねえ。脱獄の方法がそれしかねえんだったら、なってやろうじゃねえか。お前の部下に。」

「部下じゃないさ。仲間だ。」

「綺麗事を。まあいい。宜しくな、リファアード。」

ヨツツツツシャー—————
クロコダイル、ゲットだぜ!!!
!!!!!!

こいつは航海士としても使えるし、自然系だから覇気を鍛えればほとんどの敵を無双できる激強戦闘員としても使える。

ありがたい人材だ!!

あとエネルもいれば完璧だガネ!!

おおっと、いけえね。

嬉しすぎて口調がおかしくなってしまった。

それじゃ一年後を気長に待つとするか!!

こうしてクロコダイルを仲間にしたリファアであった。彼らが一年後、行く場所は海軍本部・マリンフォード。更に彼らは一年後の大騒動、インペルダウン脱獄事件の主犯でもあることをまだ誰も知らない。

イン
ペ
ル
ダ
ウ
ン
l
e
v
e
l
6

リファアールとクロコダイルの部屋にて

「ファアール。おはよう、クロコダイル。」

「相変わらず起きるのが遅えな。ス〜ス〜プハア〜。」

「あのさ。いつも思ってたんだけど、ここで煙草吸うの止めるよ!!くさいんだよ!!」

「そうは言われてもこれだけは止められねえな。そのうちガキから大人になったら分かることだ。」

「おれはもう大人だ!!それに大人でも吸ってないやつとかいるだろおが!!」

こんな日常が続く。

再集結

俺、リファアの逮捕から早一年。

とうとう、待ちに待った脱獄の時が近づいてきた。

同じ部屋にいるクロコダイルに電伝虫に音声が入らないように小声で話しかける。

「おい、クロコダイル。頃合いだ。脱獄を開始するぞ。」

「クハハハハ!!! やつとか。待ちくたびれたぜ。シャバの空気を吸いに行くか。」

「クハハ、じゃねえよ！少し小さめに話せ。」

会話を終え、一年間溜め込んだ極上と言っても過言ではない程の覇気を込めた一撃を錠と枷に叩き込む。

それにより、いままで俺を縛り付けてきた物が粉々になり、ようやく自由が戻った。その後、見聞色を使い、電伝虫の位置と数を把握する。

50匹といったところか。

東に14匹、西に21匹、南に5匹、北に10匹か。

その全ての電伝虫に電気を流し込み、情報を遮断する。つまり今は何をしても看守側にはばれないというわけだ。

「よし。次はクロコダイルお前だ。動くなよ。」

地獄の修行で鍛え上げた生命帰還を使い、髪を自由自在に操作する。

インペルダウンはLEVEL1も2も3も4も5も6も全て同じ鍵で出来ている。

その鍵穴を想像して、いわゆる合鍵と言うものを髪の毛で造り出す。

そして髪の毛を武装色で硬化する。

それをクロコダイルの錠に差し込む。

「フン。お前から言われた通り、白ひげの野郎には手を出さねえよ。海軍本部・マリンフォード。上等じゃねえか。」

「じゃあ予定通り、クロコダイル。お前は看守室にある俺の刀と錠の鍵を。俺はハン

コックとジンベエを解放するから。一旦別れるぞ!!死ぬなよ。」

「てめえこそな。」

軽い挨拶を済ませて、おれとクロコダイルはそれぞれ別方向に向かっていく。まずは、ハンコック!!!

「ハンコック!?無事か?!!!」

「り、リファアーか!妾は無事じゃ!」

「よかったあ!!!!!!!いますぐ出すから。一年前はホントに悪かった。」

「いいのじゃ。こうして助けてきてくれただけで妾は良いのじゃ。」

おれはまたまた生命帰還で鍵を造り上げ、武装硬化で固めて鍵を開ける。

「ありがとう、リファアー!!」

「ホントにごめんな。謝って済むことではないのは分かってる。でもこうでもしないと俺の気が収まらねえ。」

おれはハンコックの前で地に頭を伏せ、ジャンピング土下座を披露する。
そう、あれからと言うもののハンコックに対する罪悪感が甚だしいのだ。
アマゾンリリーはどうなっただろうか。

「や、やめるのじゃ!! 妾はもう気にはおらぬ!」

「ほ、ほんとう?」

「ほんとうじゃ。」

「ホントのホントに本当???」

「ホントのホントに本当じゃ!!」

「!!ありがたいなハンコック。これからも俺の仲間であいてくれるか?」

「!!もちろんじゃ!!これからもよろしく頼む。」

「それじゃ、インペルダウンを出たら一旦別れよう。」

「???何故じゃ?」

「俺は今からマリルフォードに行かねばならん。弟を救わないと。新聞に書いてある限りでは、もう始まっている筈だ!!」

流石にハンコックを死の境地へ連れていくわけには行かない。

マリルフォード頂上戦争。

白ひげとかいう怪物や七武海の強者達、海軍本部の猛者達が鎬を削って戦闘している、まさしく地獄絵図。

一年前なら俺も怪物並みに強かった筈だが、一年間も牢の生活をしてれば腕も落ちる。

その中でハンコックを庇いながら戦うのは少し厳しいだろう。けれども、ハンコックはどれ程俺に対して従順なのだろうか、

「前にも言わんかったか？ 妾はリファアとならどこへでも行くと。例えそれが、海軍本部であろうとも、リファアと共になら構わん!!」

こんな事を口にした。

確かにハンコックは強い、そんなことは俺は百も承知してる。

しかし、一年前の愚行が邪魔をしてハンコックが来てくれることを素直に喜べない自分がいる。

「で、でも！ あそこは本当に危険な場所なんだ！ 俺だけでなく、ハンコックも危険な目に会うかもしれない。」

「妾はリファアの婚約者であり、仲間であり、妾から見てリファアはかけがえのない人な

のじゃ。妾も行って共に戦いたい。」

……駄目だな、こりや。

ここまで信念を持つてるようじゃ、俺が何を言おうとも折れないだろう。

仕方ない、賭けてみるか。

俺の……いや、俺らの絆を。

「……分かった。なら俺と一緒に来て、共に戦い、そして一緒に無事に帰って、新世界に行こう。本当にありがとうな。」

「まあ、妻として当然じゃな。ところで、手段はもう決まっておるのか？」

「大体だけど、まず七武海のジンベエの解放だ。次に新しく仲間になったクロコダイルの仲間達を脱獄させ、インペルダウンの大脱獄作戦を執行する。あと、署長のマゼランが出てきたら俺が相手するから先に進んでくれ。後は地上に出たらジンベエの力を借りて、軍艦を奪う。まあこんなところだな。」

「なるほどの。それではまずはジンベエの所にいこうかの。」

会話を終え、俺とハンコックはLEVEL6の奥の方に移動し、横長の牢で立ち止まる。

「お前か。海峡のジンベエってのは？」

「そうじゃが。お前さんは何者じゃ？なぜ外におる？」

「俺らは今脱獄してんのよ。俺の名前はモンキー・D・リファード。」

「なんと!!お前さんがエースさんの兄者か!!……わたしはこの戦争に反対した事でここにおる!!!頼む!わしに死に場所をくれ!!!」

「もともとそのつもりだよ。待ってろ、いま出すから。」

髪で鍵を造り上げ、ジンベエを解放する。

こいつがいねえと脱獄できねえからな。

「かたじけない!!!」

「時間がないんだ!!急ごう!!ハンコックも!!!」

おれはそう言い、ハンコックの手を掴み迅速の如く走り出す。

途中でハンコックが変な声を出してたが、気のせいだろう。

それよりもクロコダイルうまくやってるかな。

と、思っていると、階段が見えてきた。

横には今まで縞模様の囚人服を来ていたクロコダイルだが、いつものコートに着替えている。

「よお、クロコダイル。刀ありがとうな。早かったじゃねえか。」

「ああ。俺は元々暗殺向きだからな。」

「そなたがクロコダイルか。妾のリファーには指一本触れさせんぞ！」

「そんな気持ち悪い趣味はねえよ。」

「クロコダイル。オヤジさんには手出しさせんぞ!!」

「そのつもりもねえよ。急いで出るぞ！時間ねえんだろ？」

「そうだったな。急ごう!!」

俺ら、クロコダイルとジンベエとハンコックと俺で階段を駆け上がる。

階段を上がっていると、段々と凍てつく空気が肌を刺す。

これは恐らく、LEVEL5の影響だろう。

でも確かLEVEL5って電伝虫が無かったフロアだよな？

「よし、扉を開けてくれ。」

「ふん。扉なんざ無意味。この右手は乾きを与える。」

クロコダイルが扉を砂に還らせた。

スナスナの実も便利でいいなあ。

「サンキュー、クロコダイル。って寒っ!!」

扉がなくなり、俺らの視界に入ったのはただ一面の銀世界。

絶対LEVEL6 よりこっちのほうが嫌でしょ。

っ！ハア、寒い寒い。

全速力でLEVEL5を走る中、白い世界には見馴れない黒いマントを羽織った男とその仲間達であろう者達が現れた。

!!!コイツは原作では瀕死状態だった白ひげを銃弾の雨で殺害し、その後何らかの手口でグラグラの実を奪い取った海賊。

マーシャル・D・ティーチ。

通称”黒ひげ”。

「ゼハハハハハ!!こりやすげえメンツだなあ!!電の王・リファアに海賊女帝ボア・ハン
コック!!更には、元王下七武海のサー・クロコダイル!!そして、王下七武海の海峡のジ
ンベエ!!!」

ここに来て、今まで大人しかったジンベエが一変し、怒りの形相を露にしている。

「ティーチ!!!貴様がなぜここにおるんじや!!!」

「ジンベエ。そういやお前はエースと仲が良かったな。確かに俺がエースをぶつ倒した
が、俺を恨むのはお門違いだ。」

今、ティーチを倒してやってもいいんだが、ここでコイツらと闘うのは下策だな。
深く原作でも書かれていない能力に加えて、仲間達もいる。
今は一秒でも時間が惜しい。

「悪いが、ティーチだったよな?そこを退いてくれるか?急いでるんだ。」

「ゼハハハ。お前は頭が切れるようだな。ああ、無駄だとは言わねエ。この世に不可能という事は何一つねえからな。空島もあつたんだ!!」ひとつなぎの大秘宝”もそうさ!! 必ず存在する!!」

なんか、こいつの瞳にはすつごい、馬鹿でかい何かが見える。

相当な野望を持つてるんだろう。

「わずか数時間後おれ達が!!世界を震撼させる最高のショーを見せてやる!!!」

「構うなりフアー君!先を急ごう!!」

ジンベエも怒りは沈めて、時間を優先している。

まあ、また海軍本部で会えるんだ。

運が良かったら勝つこともできる。

俺達はLEVEL4への階段を登り、ティーチたちはLEVEL6へと向かっていった。
また同じく扉をクロコダイルに任せて、砂に還らせる。

向こう側灼熱のフロアに見えたのは黒い巨体。

コートの中から翼があり、帽子からは角が。

どう見てもマゼランだ。

その後ろには何人もの看守が。

あれ？なんで見つかってんだ？と思うと同時に看守たちが叫ぶ。

「さ、こちららLEVEL4！LEVEL6 より逃れた囚人、七武海ジンベエ!!電の王・リファア!!海賊女帝・ボア・ハンコック!!元王下七武海クロコダイル!!あ、あ、表れましたあ!!!応戦します!!」

と、言って覇気も、海楼石も備わってない只の銃弾を俺らに向けて放ってくる。

……弱すぎるな。

俺はサンダールームを展開して、放たれた銃弾を電気のエネルギーで全て地面と垂直に落とす。

と同時に看守全員に電気を流し、感電状態にして意識を失わせる。

サンダールームを消失させて、マゼランと一対一に持っていく。

「やってくれたな!!電!!!」

「クロコダイル!!お前は部下を解放しながら先へ進め!!ジンベエとハンコック!!ジンベエとハンコックはそのまま地上へ出て、軍艦を奪っておいてくれ!!俺は少し、コイツに時間がかかる!全員、地上で落ち合おう!!!」

「了解!」

皆が俺の前から走って消えていく。

「いいのか?見送っちゃまって?」

「止めてもお前が俺のことを止めるだろう。それに、俺はお前で手一杯だ。残りはハンニバルに任せた。」

「へっ!そうかいっ!!」

電神剣を鞘から引き抜き、新たな技を披露する。

「参の舞、竜怨の構え!!!」

おれはその場に独特の構えを取ったまま動かずに敵の攻撃を待つ。

参の舞は緊禪一番、つまり相手の攻撃を自分のチャンスにする技だ。

「なにをする気か分からんが、お前には最初から全力で行かせてもらう!!」

「毒の巨兵・地獄の審判!!!」

マゼランの後ろに毒の巨大な造形物ができた。

それにあの動き、まるでマゼランと連動して動くみたいだな。

厄介な物を隠し持ってやがったな。

しかも毒の広がり様を見ると、石でもなんでも毒が感染するように、どんどん広がっていつてる。

ふん、面白い。

負けて死んだらそれまでの男だったって事だ。

もちろん、負ける気はないがな。

そして、マゼランが腕を上げて俺に振るってきた。

俺は竜怨の構えを取ったまま動かず、カウンターの期を狙う。

.....きた!!!

腕が俺の頭すれすれに、丁度中央辺りに来たとき、今まで構えていた竜怨の構えから横に弐の舞を一閃。

毒はみるみるうちに真つ二つになっていき、主であるマゼランにも衝撃による斬り傷を負わせた。

「弐の舞、電光の一閃!!!」

技名を詠唱して、マゼランの次の動きを伺う。

先程までの毒は消え去り、埃だけが俺らを包んでいた。そんな中、埃を大きく上げながらマゼランはどしりと立った。

「ハア、ハア、ハア。ここは地獄の大砦。お前らをみすみす逃がすわけにはいかん。これで最後だ。」

「毒竜!!!」

恐らく、残っている全てを賭けて俺に挑んで来てるのだろう。

普通サイズより二倍程大きい毒竜を出してきた。

なら俺も力を出して応えよう。

「俺は兄弟を助けるため、お前を倒して先に進む。例え死んでも恨んでくれるな。手加減はしねエ。」

「電体武人!!!」

体が蒼く発光し、電気の体となった俺。

この技は体に俺の最大ボルトの電圧をかけることで、細胞の活性化を図るドーピング技。

すなわち、身体能力を極限以上に引き上げる。

ギア2と同じ様だが、血液ではなく体にある全ての細胞を強化している。身体能力の飛躍率はギア2の比ではない筈だ。

「いくぞ!!電!!」

「来い!!マゼラン!!」

静寂を破り、先に動いた俺はマゼランの前方上空に電気の速度で移動する。

サンダールーム内では瞬間移動が可能だが、常時は電気の速度で移動が可能なのだ。

電気の速度は人間の感覚の速度よりも早い。

俺が移動してからカンマ数秒後、マゼランははっと気づき俺の方向へ毒竜を投げてる。

俺は最初から来ると分かっていたので、毒竜が投げられた直後にマゼランの右側に移動。

そして、左側に移動。

この行動はマゼランの視覚から見れば俺が複数人いると脳が認識してしまう行動である。

それにより、マゼランが朦朧としてる中、俺はマゼランの真正面に移動する。

そして、こう告げる。

「これが俺とお前の力の差だ。残念だが、お前では俺には勝てない。」

「肆の舞、炎電無双!!!」

腰から電神剣を抜き、新たな舞、炎電無双を繰り出す。炎電無双は電気の熱を利用して何百万にも及ぶ炎を刀身に纏わせ敵を斬りつける技。

その姿はまさに無双。

それをくらったマゼランは無気力に前のめりに倒れ伏した。

なんとか、倒しきれたな。

しかし、電体武人は身体への負担が大きく、そんなに使っていない様な技ではない。

加えて、効果時間もあまりないので、早めに決着を着かせなければ、俺の体は内部から崩壊する形になってしまう。

今のマゼラン戦で少し体が重くなったが、とりあえず先を急ごう!!!

俺は倒れているマゼランを一瞥し、LEVEL3へと向かった。

——インペルダウン海上1階の正面入口——

「遅せえな、リファアの奴。せっかく副署長と名乗る阿呆も倒して、コイツらを出すのに時間を掛けたつてのに、まだ来てねえなんてな。」

「!!ボス、来ました。」

お！あれはクロコダイルの部下達だな。

なんか、すごいバラエティーに拘ってるな。

上半身露出してるハゲや、頭の上で両手を合わせてクルクル回ってるオカマや、メガネかゴーグルか分からないものをかけているオタクがいた。

掛ける言葉が見つからないので、とりあえず分かりきってるがクロコダイルに話し掛ける。

「よう、クロコダイル。無事で何よりだ。こいつらは？」

「コイツらは俺が昔に興していた秘密犯罪会社・バロックワークスのオフィサーエージェント達だ。順にMr1、Mr2、Mr3だ。足手まといにはならないだろう。Mr1は戦闘員、Mr2は他人の変装が可能、Mr3は蠟を応用して使うことができる。」

すると、あちら側から話しかけてきた。

「俺はダズ・ボーンズだ。宜しくな、船長。」

笑顔は無いが忠実性の強そうな、そんな人物。

「あちしはボン・クレーと言うのよう！宜しくね、リフちゃん!!」

逆に笑顔が凄くあつて責任感や友情が厚そうな人物。

「私はギャルディーノだガネ。宜しくだガネ。」

そして、笑顔も忠実性も友情もないが、突っ込みに長けている人物。

「おう!!宜しくな!!俺はモンキー・D・リファード!!仲良くやろうぜ!!」

すると、なにか糸が切れたかのようにボン・クレーとギャルディーノは腰を下ろした。

「なによお。0ちゃんが認めた男だから相当の悪党かと思っていたら普通のいい人じゃない。ジョーダンじゃないわよ。」

と、言つてボン・クレイがまたクルクルと笑いながら回りだした。

「はあ、私としたことが読み違えたガネ。私も同じくボス以上の悪党かと思つていたガネ。疑つてすまんガネ。」

「いやあ、クロコダイルには敵わないよ。ボンちゃんとオタクでいいかな?」

「お、オタク?」

戸惑うギャルディーノを無視し、港の方へと歩み始める。

「クロコダイル。軍艦は?」

「ジンベエと女帝が奪いに行った。あの霧の向こうに見える一隻の軍艦がそうだろう。」

「ん？もう此方の方向へ引き返して来てるぞ。奪い終わったのかな。」

それから数十分後、ジンベエとハンコックを乗せた軍艦にクロコダイル達と共に乗り込んだ。

「ジンベエとハンコック！無事で何よりだ！マリルフォードへと急いでくれ！」

「しかし、リファークン。その前に一つ大きな問題があつてのう。正義の門が開かん限り、儂らは永遠にここからでられんのじゃ！」

「そこはこの俺がいるんだ。任せてもらおう!!」

???

正義の門手前にて

「よし!!それじゃ、お前ら一旦下がっててくれ!!」

俺は軍艦の船首に立ち、仲間達を船首の方から下がらせる。
そして、正義の門へと腕を伸ばし、技を発動する。

「Thunder breaking the gates of justice」

「英語か。随分と博識だな。」

流石クロコダイルだね。

英語を知ってるなんて。

まあ、これは前世での曖昧な英語の知識を組み合わせて作った英文だから、凄く意味が分からないと思うんだけどなあ。

「The rulers of the electric charge of all. Is familiar with the foot become es a hand our (全てを司る電の支配者よ。我の手となり足となれ)!!!」
 「電の支配者 (サンダーラー)!!!」

詠唱し終えると同時に腕から超高質力の電気が正義の門へと飛んでいき、その後まもなく正義の門が開門した。

「!?!?!」

後ろで驚いてる仲間がいるが、この原理は単純明快。

原作では動力室と呼ばれる正義の門の開閉の為のスイッチがあった。

俺はその回路を電気で操作しただけだ。

しかし、この何千万tにも及ぶ重い扉を開けるには今くらい大きい電気を使わなければ開けられない。

これでまた一つ体に負担が大きくなるが、この際仕方がない。

「さあ、行くぞ!!海軍本部・マリンフォード!!!」

「「「うお〜」」」
!!!」

——時同じくして、海軍本部・マリンスフォード——

ここは三日月状の地形を持っている島、海軍本部・マリンスフォード。

ここでは先刻から傘下の海賊団含む白ひげ海賊団と海軍の鋭勢達が白ひげ海賊団二番隊長エースの処刑を巡って戦争をしている。

そんな折に、海賊船に乗っていた白ひげは不敵な笑みを浮かべながら、呟く。

「グラララ。何か企みやがったな？ 智将、仏のセンゴク」……!!」

そして、処刑台にいる英雄ガープは家族であるエースの処刑に対して涙を流しながら海軍である自分の責務を果たそうとしていた。

刀と刀がぶつかる音や銃声の音、人の騒ぎ声や呻き声が鳴り止まないマリolfォード。

そのマリolfォードの上空に一隻の軍艦が島に向かって降下していた。それにいち早く気がついた海兵は指を指しながら、声を上げる。

「あ、あれはなんだ!!?」

近くにいた一人の海兵も気付き、その方角を見る。

「あれは……………軍艦?!!」

——時は少し遡り、ここはリファー達が乗っている軍艦——

俺らは今、海軍本部に入るための正義の門の近くにいた。

何故かただいま絶賛海門中なのである。

原作の通りだと、確か黒ひげの仲間の催眠術師が海兵に催眠術を掛けて通れたんだよな。

まあ何の手も使わないで開いたのは此方としても有り難い。

周りでは驚きの声が上がっているが、詳しくは話さないでおこう。

「皆！驚くのも構わないが、急ぎたいんで軍艦を飛ばすぞ!!! 近くにある物に掴まっておいてくれ！」

するとオタクは驚いた様に話し掛けてきた。

「軍艦を飛ばす……？なに馬鹿な事いつてるんだガネ。こんな重量がある巨体の船

が飛ぶ訳ないんだガネ。」

まあ、確かに軍艦は大きい。

小舟を飛ばした、電撃砲では海軍本部までは届かないだろうな。

………
ならあれをつかうか。

「Mr3。常識の範囲で不可能だとしてもリファアの奴ならそれができる。何故ならあいつは真正正銘、化け物だからだ。」

「相変わらずクロコダイルは酷いな！化け物呼わばりするな!!とりあえず、急上昇するから安全確保しといてね！」

と言ひ残し、一人で俺は船尾の方へと向かう。

俺も安全確保の為、柵に捕まりながら船尾から海へと腕をかざし、技名を言う。

「………
絶・電撃砲!!!」

放たれた巨大なエネルギーの塊。

その風圧で巨体の軍艦は空へ走り出す。

絶・電撃砲は従来の電撃砲の威力を何倍にも引き上げ、引き伸ばした技。

それは何々にも及ぶ軍艦を空に飛ばせるほどの破壊力。

それにより、リファアを含むインペルダウン脱獄組を乗せた軍艦は一直線に海軍本部・マリンフォードへ向かっていった。

彼らが挑む戦争の名は、後の世間までその名を轟かすほどの大戦争、マリンフォード頂上戦争。

白ひげ海賊団、海軍本部、電の王リファア、そして麦わらのルフィ、革命軍参謀総長

サボ。あらゆる方面の猛者達が海軍本部・マリンフォードで暴れまわる。